

私の幼児教育論 VII 保育の基本 (五)



神 沢 良 輔

三 保育の基本 (四)

— 幼児とのかかわりあいの中で —

(VI) 必要なときに、必要なところに動けるよう、余ゆうをもつて幼児の活動を見つめる

(1)

幼児は保育者の動きを常に見つめている。それは、一方では保育者の目（視線）を追って、それによって自分の行動に対して承認をしてほしいということのためでもあるうし、他方では、保育者が自分の活動している近くにおいて見守っていてほしいとか、自分のしている活動に参加してほしいという要求によるためでもある。

ろう。

このような要求は、学級を構成しているすべての幼児がもっていることはいうまでもない。

だから、ひとりの幼児が「先生、ちょっときて」と大きな声で叫ぶので、なにごとかと思つてとんでいってみると、保育者の顔を見てにっこり笑つて、そのことだけで満足してなにもいわずに活動を続けたり、また保育者の手をにぎったりして、身体接触を求めることだけで終わるといふことはよくあることである。

しかし、それだけですめば誠に結構なことであるが、ひとりの幼児が保育者とのかかわり合いに成功すれば、他の幼児たちもそれをだまってみているわけにはいかない。こんどは別のあちこちにいる幼児たちから、「先生、ちょっときて」「先生、早くきて」というようなことばが、つきからつきへと、出てきて、保育室は

保育者のとりあいのようなことになり、大きわざとなる。

このようになると、あちらの幼児から、こちらの幼児へと、保育者は、幼児たちの間をかけずり回るということだけに終始して収拾がつかなくなってしまう。

もちろん、このように保育者が幼児の要求を受容して——（感情を受容してといった方がよいかもしれない）——ひとりひとりの幼児に対応していくことは決して悪いということではない。

けれども、中には、保育者との関係はもちたいが、大きな声が出せずに、それを聞きながら、しょんぼりして、保育者から離れていくように見える幼児もある。このような幼児たちのなかには、保育者が自分との関係を拒否しているように思いこむということもあつたりして、それが登園拒否などということの原因になつたりすることもある。

(2)

いうまでもなく、ひとりひとりの幼児は、保育者との人間的な関係に入りたがっているのであり、このようなひとりひとりの幼児との人間関係に入ることの重要性にいつては、これまでもくり返し述べてきた。

しかし、他方では、保育者はひとりの幼児だけを対象として保

育するということはできないということでもある。そこには、保育者のひとりひとりの幼児とともにいるという保育の基本となる構えと、それを満足させるための基本的な保育の技法があるということになる。

つまり、そのためには保育者が、それぞれの幼児とかわりあっているそれぞれの事態において、どのようにするのがもっともその場面で望ましいかということ判断する必要がある。保育とは、そのような、“保育者の判断”にまかせられていることがきわめて多いのである。

“先生、ちょっときて”とある幼児がいったときに、その幼児が保育者になにを求めているか、ということや、その幼児とのこれまでのかかわりあいの経過や、今日一日の保育の流れの中でのかわりあいの中からみてどのようにすればよいかなど、いろいろのことが考えられるであろう。そして、その場面における判断が保育者の行動となつてあらわれてくるということになる。

だから、ある時は、その幼児のところへいかずに、視線をあわせるだけで承認の感情を示すとか、時間的な余ゆうをもたせて、“ちょっとまってね”とか、“あとでね”とか、“○○ちゃんのがすんだらね”とかいうような反応をすることもあろう。また、ある幼児が、“先生、きて”とはじめて自分の意志をことばで表現

したような場合には当然、すぐにその幼児のもとに行つて、保育者としてのそのことに対する喜びを示してみることがだつてある。でもこのような、いろいろな場面における判断は保育者がすることであり、しかも、一瞬の間にならなければならないことである。

もし、これらの反応に時間をかければ、幼児のきわめてはげしい「あの瞬間的な要求（行動）」やその変化にはついていくことができないということになるし、また、その瞬間に反応しなければ、あとでは意味のない行動になることが多いからである。

しかも、このようなことは、現場で保育をしている保育者でなければできないことである。第三者にとっては、客観的に事態をみることはできて、判断はできないということであり、そこに、保育者の保育者たる所以があることになる。

(3)

このような保育者の判断ということ、保育者自身の行動をきめるもつとも基本になることではあるが、保育者が動くということとは、いったい幼児にとってどのようなことになるのであろうか。

幼児は、保育者の動きに対して注目しており、常にその影響を

受けて行動している。

つまり幼児は、

“保育者と一緒に遊びたい。”

“保育者のいる近くで遊びたい。”

“保育者に自分の行動を承認してもらいたい。”

“保育者に自分の存在や自分の特性、能力などを認めさせたい。”

“保育者のからだにさわって安定感をもとめたい。”

などといういろいろな要求をもちながら、保育者を見つめているのであり、それは「保育者と自分とがなんらかのかかり合いをもっている」ということからくる安定感につながっていることに、また、それは自分の友だちに対しても同様に、それを認めてほしいという要求につながっている。

だから、保育者が動くということは、ひとりひとりの幼児のもっている保育者へのかかり合いのバランスが崩れるということになるのである。

換言すれば、ひとりひとりの幼児は、保育者を中心とした、力学的なバランスの中で生活しているということがいえるからである。そのため、保育者の移動は、学級という生活場の「力点」が移動したということになる場合が多い。保育者が移動すると、これまで集中して続けていた活動を、「先生がいちまいったから

「やーめた」などと簡単に打ち切る幼児がでてくるということはよく見られることである。もちろん、この逆に、保育者が入って遊んだため、そのグループの活動が急に活発になったということだってありうる。

このようなことは、幼児の発達の状態、時期——（その学級が成立してからの、その保育者と幼児とのつながりの時間的な長さ）——、遊びの経験などによっても異なることはいうまでもない。とくに、入園当初や保育者がかわった新学期などのおきにおいては、いろいろな多くの問題を含むであろう。

(4)

このように見てくると、保育者が動くということは、幼児たちに非常に大きな影響を与えるということになる。

だからといって、保育者はじっとして動かぬ方がよいということでは決してない。つまりは、ひとりひとりの幼児たちの活動の状態を見つめて、「必要なときに、必要なところに動ける保育者」になつてほしいということである。また、動くときは、その意味が保育者にとっても納得できるものでなくてはならないし、また、その意味を考えながら、保育者が判断して動けるだけの余ゆうを持つべきだと思うのである。

このような意味のある動きは幼児にも理解されていることが多く、幼児もそれなりの対応が可能となり、それが幼児の安定感にもつながり、温かい落着いた学級のふん囲気が形成されることになる。

このようなことは、理論でいうのは簡単ではあるが、実際にはきわめて困難なことである。でも、すばらしい保育者の動きを見てみると、本当にむだのない、意味のある動きがひしひしと第三者にも感じとられるのである。

それは、毎日の実践の中から、保育者の自分自身に対するきびしい反省の中から生まれてきたものであろう。だから、それは、幼児と保育者とともに織りなす、一種の芸術作品であるということができる。

入園当初、若い発らつとした保育者が機関車になって、先頭に立ち、大勢の幼児たちが客車になってあとにくっついて、喜々として園庭を走っているようすは、まさにこの世の天国であり、また、一幅のすばらしい絵でもある。

しかし、保育室では、このような集団の中に入れない幼児がうらめしそうな顔をして、ぼんやりと友だちの動きを見ていることだってあるのである。

（暁短期大学）